

# スクールアイドルとの 日常

ぽぽろ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは主人公の棗 郁人（なつめ いくと）とμ s、Aqours、虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会との日常を描く物語である。

# 目次

$\mu$ ,  
s

素直になるクスリ

1

A q o u r s

起きたら鞠莉がいた件

7



μ, s

## 素直になるクスリ

「ねえ、郁人？ もっと私を撫でなさい？」

「う、うん」

彼女に言われて綺麗に手入れされている赤髪を優しく撫でる。

サラサラとした感触がいい。

彼女も気持ちいいのか艶かしい息が漏れている。

(まさかここまで効くとはなあ……)

彼、なつめいくと 棗 郁人は西木野真姫の頭を撫でながらそう思っていた。

普通の彼女からはありえない甘い声に彼女らしからぬ様々なお願い。

何故こうなったのか、それは少し時間を遡る………

\*\*\*

僕はμ, sをサポートするマネージャーとしてこれまでμ, sと様々な事をしてきた。  
合宿にも一緒に行ったし、ことりさんの留学騒動も裏で色々策を弄して阻止した。

なんで女子校に男子がいるの？ というツツコミはよくアニメである人口減少の為の共学化へのテスト生だとか理事長と親が知り合いでくみたいな脳内設定で頼む。あとマネージャーをやり始めたのは穂乃果さんに脅されたから。弱み握られたの。そんなこれまで精一杯頑張って来た僕だが、唯一頑張りたくないもの、やりたくないものがある。

それは勉強だ。

しかし学生にはやりたくない勉強をしないと行けない時がある。

テストという魔物が学校にはいるのだ。

だから教えを乞うべく来た訳だ。

っていうかテストが近づくと必ず真姫ちゃんに教えて貰ってる。

本当に神さま仏さま西木野真姫さまやで。

話は変わるが彼女はツンデレだ。

本人は認めようとしないうし、言ったら脛を蹴られる。

だから、sのマネージャーとして長いこと一緒にいるが本音を図りかねている所がある。

だから！ A—R—I—S—Eの優木あんじゅさんに頼んでそれ伝いに素直になれるクスリと言うものを作って貰った。

普通にあれが通るあの人とUTXには逆らわないようにしとこ……  
それを彼女が席を離れた時に飲み物に入れた。

ぐふふ……これで本音が丸裸だぜえ……

\*\*\*

飲んだ直後は変化は無いように見える。

普通通りだね。

「何よ。そんなジロジロ私を見て。恥ずかしいじゃない……」

「あ、ごめん。真姫ちゃんが可愛くてついね」

効果を確かめるために多少の恥ずかしい事を言わないと行けないだろうと判断し、僕は絶対に言わないであろう言葉を言った。多分というか絶対後で死にたくなる。

いつもならきつと『ばっかじゃないの!』

と言うはずだ。

このクスリを作ってもらう為にあんじゅさんの言う事を何でも一つ聞くという代償を払ったんだからあってくれ！ 多分薬の実験体にされて大変な事になるから！

「あの……えつとその……ありがとう」

何この子とっても可愛いんだけど。

俯きながら顔を赤らめて言っているのが可愛いポイント。

本当に効果はあるんだね。

今日は色々試さないと……

「僕の事好き？」

普通だったら殴られるであろう質問。

これは反応が楽しみ(ゲス顔)

「バカ……大好きよ。私達が困ってたら直ぐに気づいて助けてくれる貴方を私はその

……好ましく思ってるわ。きつとムッsの皆もそう思ってるはずよ」

「お、おう……／＼／＼」

何これ言われる方もくそ恥ずかしい。

でも何より真姫ちゃんが可愛すぎる！

ツンデレもいいが素直な真姫も可愛いんだなあ……

後で希さんにでも送つとこ

\*\*\*

次は頭を撫でて見ようと思う。

いつもだったら即刻手を払われて「変態！」って言われる。ソースは俺の実体験。

穂乃果先輩だったら喜ぶのに……



恐る恐る彼女の綺麗な髪に手を伸ばし、触れると彼女がビクンと動いたのがわかった。

殴られるか？

ギユツと目をつぶって痛みに耐えようとしたがいつまで経っても拳は飛んでこなかった。

そこでゆつくりと目を開ける。

「早く撫でなさい。穂乃果にはやる癖に私にはいつもやってくれないんだから」

「だっていつもは殴ろうとするじゃん」

「あれは……！ その……恥ずかしいからよ！」

なるほど……いつも羨ましく思ってたど。

可愛いかよこいつ。

それから彼女は撫でる手を止めようとする。「撫でろ」と言う程になった。

何か真姫ちゃんが可愛すぎてこれ以上理性を抑えられる自信がないから次でラストにしよう。

最後の質問はやっぱりこれだろう。

「ム、sは好き？」

質問の答えは直ぐに帰ってきた。

「勿論よ。穂乃果はバカで無鉄砲な感じだけどいつも明るくて私も何度も救われたわ。海未はとても真面目で……………」

「ことは……………」

この調子でμ、sの皆のいい所を一人一人丁寧に話していた。

それから彼女は本当にスクールアイドルがμ、sが大好きな気持ちが伝わってきた。

あ、今のは携帯で録音済みです。さつきμ、sのグループに送りました。

次の日顔を真っ赤にした真姫ちゃんにタコ殴りにされたのは言うまでもないだろう。

そして彼女はμ、sの皆からからかわれたのも。

特に希さんとにこさん。

## A q o u r s

## 起きたら鞠莉がいた件

とても暖かい……

陽だまりの様な温かさだ。

そしてほのかに香る甘い香りやその陽だまりの様な包み込む温かさが安らぎと安心を与えてくれる。

小さい頃、お母さんに抱きしめてもらった時を思い出す。

それほどに暖かく安らぎを与えてくれる。

まるで人に抱き締められているような感じだ。

……ん？

普段は1人で寝ている僕だからというか高校生にもなってお母さんと寝ている人は居ないかもしれないが、僕は1人でいつも寝ている。

だから人肌を感じるのをおかしい。

今までのウトウトとしていたのが一気に醒めたのを感じた。

そして、じつと耳を澄ませるとすうすうと言う規則的な息遣いが聞こえる。

ん……？

ゆつくりと恐る恐る目を開けるとそこには陽の光を受けてキラキラと眩しく輝く金髪をもつ少女がいた。目の前に

僕の知り合いの中で金髪は一人しか居ない。

そう……小原鞠莉だ。

………なんで僕、ホテルニューオハラにいるの？何で鞠莉の部屋にいるの？

取り敢えず布団から出ようとしたが、がちりと彼女にホールドされていた。

パジャマのせいで普段より伝わってくる彼女の柔らかく温かい感触。そしてふにふにと形を変える大きなモノ。

どうやってここに至ったか記憶無いなあ…

取り敢えず起こして問いただそう。

「起きて〜！何で僕はここにいるの！」

ゆさゆさと揺らしてみても起きる気配がない。

終いには

『マリーだけをずっと見てなきやNOよ〜？』

なんて寝言を言う始末

どんな夢見てるの……？

あと起きないし

もつかいゆさゆさとしてみる。

「マリーは郁人の事 very very Loveよ〜」

「ねえ多分つて言うか絶対起きてるよね。」

「起きてないわよ〜ぐ〜す〜」

「起きてるじゃん……」

するとゆつくりと身体を上げて起きる鞠莉ちゃん。そしてぐつと身体を伸ばすと彼女の豊満な胸が強調され目を奪われた。

そしてバレないようにサツと視線を外に移す

「Good morning・ダーリン！」

「おはよう。鞠莉。」

そう言えばと前置きをして僕は切り出した

「何で僕は鞠莉の家にいるの？」

「一緒に寝たくて連れてきちゃった♪」

道理で記憶が無いわけだ。きつと拉致されたんでしょ。

そう考え込んでいるとグイツと布団の中に引き釣りこまれた。顔をグツと近づけられ……

そして彼女のもつ携帯からはカシヤという音。

……………

「消してえええええ！」

写真だけ見たら完全に事後なんだから誰かに見られたらヤバい！

もしそれがダイヤさんだったら……想像もしたくない。

「消してええええええ！」

「NO！」

「それなら僕に携帯寄越して！ほら！」

「嫌よ〜♪もうこんなに積極的に近づいてきちゃってマリーの事をそんなに愛してくれてるのね！」

「そんな場合じゃないって！ほら、携帯頂戴！そして消して！」

「もうそんなに揺らさないで〜♪操作ミスで送っちゃうかも〜」

「ぐっ！」

2人でもみくちやになって携帯を巡る攻防が繰り広げられている

「あく間違つてA q o u r sのグループに送ってしまったわ〜」

「はあ!?!」

わざとらしく、棒読みでそう言った鞠莉

冗談じゃない!

そしてバイブレーションでガタガタと震える僕のスマホの姿が:

あまりにも震動するそのスマホは尋常じゃないほど動き、ぼとりとテーブルから落ちた。

ぱつと携帯を見ると、大半が千歌と曜とダイヤさんだった。ダイヤさんからはこんなメッセージが……

『後でじっくりお話を聞かせて頂きますね。』

郁 人 さ ん ? 』

ひいひい!

「ほら、ダーリン学校に行くわよ?」

「今日は休む。ダイヤさん怖い……」

「んもおワガママさんね〜♪」

「元はと言えば鞠莉が!」

本当にこの人が写真を送らなければ平和だったのに。

敢えて拉致に触れないのは察して

「学校行かないのならもつとvery very 過激な2人の写真送っちゃおうかしら〜♪」

え……………？

「寝てる時にまさか郁人がマリーにあんな事をしてくるなんて……………／＼／＼」

顔を赤らめてモジモジとしだす鞠莉

……………僕寝てる時に何したのお!?

「分かった!行くから本当に辞めて!やめろ下さい!」

土下座をして懇願する。本当だとしたら命がないよ!

「それじゃあ行きましょう!Go to school!」

\*\*\*

「はあ……………憂鬱。」

浦の星女学院についての第一声はこれだ。

何で女子校に男子がいるのかはテスry…………

「あ!いつくん!」

教室に入るとこちらを見つけた曜と千歌がドタドタと近づいてきた。

「なにあれ!ちか何も聞いてないよ!ちかといつくんの間には隠し事はダメって昔から言ってるじゃん!ちゃんと私に報告してよ!」

「千歌ちゃんかせめて私に報告して欲しかったなあ…そしたらそっちに行つたのに

一緒に寝るとか羨ましい……………」



おいおい、曜。それはどういう意味だい？

「あれは鞠莉さんに拉致られて仕方なかったの！寝てる時に拉致られたの！」

「いつくんが寝てる時に油断してるのが悪い！」

「そうそう！ちゃんと寝てる時にも鞠莉ちゃんに連れ去られないか気を張ってないとダメー！」

「寝ながら警戒とか神経すり減らして過ぎて早死するわ！」

幼馴染2人と言い合っているとボンツと優しく肩に手が置かれる。  
後ろを振り向くと……………

そこにはとつてもいい笑顔のダイヤさんがいるではありませんか

忘れてたあ……………

「郁人さん？少しお話があるのですが？」

「僕には無いんですけど……………」

「私にはありますので付いてきてくださいますか？不純異性交遊は禁止とあれ程言ったはずですよね？」

「いやあ…あれは僕は悪くないと思いますけどねえ……………」

「そんなにグダグダ言っでないで大人しく着いてきて下さい！」

そしてそのままズルズルと生徒会室へ僕は引っ張られて行った………